

贈り物

(原文は英語)

ラウラ・シルバ・ベルトキ (19 歳)

ブラジル

死神よ、

私はようやく、すべての意味を理解したように思う。つまり、たくさんの人があなたに連れ去られていったことについて。私はあらゆる出来事には起きた理由があると信じている。この謝罪の手紙を書いているのもそのためだ。私とすべての人間からの謝罪である。

私はずっと、世界で唯一完全に自分だけのものであるのが命だと考えてきた。死神よ、私は一体どこで間違ってしまったのだろう。命とは宇宙と自分との間の秘密のようなものであり、命はそれゆえに孤立しているものだと考えていた。結局のところ、人生は続いていき、私たちは一人でそれをくぐり抜けていくのだから。

激しい恋に落ち、その恋を失って浅瀬に飛び込んだとき、私は孤独だと感じた。彼が去った後、自分一人で前へ進んでいった。そうするしかなかったのだ。いつも友だちと笑いあっていた土曜の夜を思い出しながら、私は孤独だと感じた。友だちがみな大学へ進学する前のことだ。私は進学せずに残り、そのまま前に進んでいった。私の祖父、日曜の午後決まって一緒に映画を観て過ごした祖父が 2 年前の夏に亡くなったとき、私は孤独だと感じた。死神よ、私は泣き叫んだ。絶望した小さな子どものように。さまざまなことがあったが、それでも私は前に進んでいった。

そして、病に侵され肺が半分失われたとき、自分の命は自分だけのものではないと気がついた。なぜなら、たとえ歩いていくのは自分一人であっても、人生は常に変わり続け、影響を受け続けるのだから。人生の小さなピース一つ一つは、誰かによって埋められていき、もはや自分だけのものではなくなる。

そして、私の命はまた、私の母のものでもあるのだと思う。母は毎日電話をかけてきて、体調は良くなったかと尋ねてくれる。私の体調が良くなることはないと思っていた。私の命は父のものでもある。父は電話口で涙をこらえている。あなたが私を連れ去っていく前に、誰も病院に来てさよならを言うことができないからだ。私の命は幼い従弟のものでもある。従弟には、退院したら一緒にかくれんぼをする約束をさせられた。あの子はまだ、私が約束を守れないことを知らない。死神よ。私の命は彼ら皆のものだ。祖父の命が私のものでもあったように。

けれども、死神よ、命は分かち合うものではない。そうでしょう。私は何もわかっていなくて、そのことに気づくまでに長い時間がかかった。命は私が思うほど孤立したものではないとようやく理解し

たとき、命は自分のものですらないのだと悟った。命は、あなたのものだ。

私は、命は自分のものだと考えていた。誰一人、私から奪うことができない唯一のものだと。しかし、あなたのことを忘れていた。あなたは命を私に貸し与え、そして今、私からそれを取り戻そうとしている。こここのころ、あなたは多くの人を連れ去ってしまった。正直に言うと、私にはその理由が分かった気がする。きっと、私たちがあなたを落胆させたからだろう。私たちは身勝手に欲深く、自分たちの住処を破壊している。しかし死神よ、一番大きな理由は、私たちがあなたの役割を奪ったからだろうと思う。私たちが、死神を代行し、誰に生きる価値があるのかを選んでいるからだろう。私たちは、食料、病気、武器、偏見、金のために、毎日殺し合いをしているのだ。

こういっただけを止めるために戦うべきだった。

死神よ、あなたが来た理由はそれだろう。私には分かる、私たち人間は、あなたからの贈り物を受け取るに値しない。なぜなら、命は贈り物だからだ。そうでしょう。一つのプレゼント。一度のチャンス。私たちはそれを無駄にしてきた。命は、私たち人間は幸せを感じ、涙を流し、愛するに足る存在だとあなたが考えたゆえのプレゼントだ。

秩序なく、さまざまな営みや思い出が入り混ざっているのが人生だ。私の人生は、たくさんの思い出に満ちあふれている。初めてのキス、友だちの笑顔、映画の途中ソファで寝てしまった祖父の姿、両親が抱きしめてくれたときの匂い、勝って目を輝かせる従弟の顔見たさにわざと負けたゲーム。その一方で、別れや隔たり、そして死。

人生には、すべてが含まれている。人生はまた、死でもある。死神からの贈り物なのだ。あなたは少し早く、私への贈り物を取り返しにきてただけだ。

最後になるけれど、死神よ、私はあなたからの贈り物に感謝していると伝えたい。そして、愛し、笑い、泣き叫び、生きてきたのと同じぐらいの懸命さで戦ってこなかったことを申し訳なく思う。だから、私自身とすべての人たちから、贈り物を大切にしなかったことを謝りたい。いつの日か私たちに、もう一度チャンスをくれることを願っている。

ありがとう。